

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第707号 平成26年3月20日

## キャリア教育（1）

3月は、学校の卒業式シーズンです。

今年も、幾つかの私立高校や私立大学の卒業式にご案内をいただき出席しました。卒業式に出席して感じるのは、生徒達の立ち居振る舞いはまるでその学校の教育力を映し出す鏡の様だという事です。どんなに美辞麗句を並べても、卒業生の姿は実に雄弁に様々な事を感じさせてくれます。

ところで、卒業式に出席した際、私にはいつも気になる事が有ります。それは、卒業の時点でも進路が決まっていない卒業生が少なくないという事です。

高校生であれ、大学生であれ、卒業後は進学や就職、あるいは家業を手伝うといった選択が一般的だと思います。それが、進学もせず就職もしない、かといって家業を手伝うという訳でもない、いわゆる「進路未定」というのはどういう事なのでしょう。進学や就職を希望しチャレンジしているが卒業時点ではまだ決定していないというのであればともかく、進学も就職も特に考えていないという意味での「進路未定」というのは、その行き付く先は「無業」という事であり、そうした若者の存在に危機感を覚えます。

進学も就職も希望しない若者達のいい分は、「特にやりたい事がない」「自分にあった仕事がない」「自分に何が向いているか分からない」といったような事で、取り敢えず「フリーター」でもやりながら自分探しをするという事なのかも知れません。もっとも、そんな事で「自分が本当にやりたい事を見つけた」という話は、ついぞ聞いた事はありませんが・・・。

大村はま先生がおっしゃる様に、学校教育の目的が、子ども達を一人前の大人として社会に送り出す事にあるとすれば、進学もしない、就職もしない、積極的に何かをしようとしなない若者達を少なからず学校から押し出してしまっている現状を見る限り、学校現場で今盛んに行われている「キャリア教育」の効果に疑問符を付けざるを得ません。

法政大学の児美川孝一郎教授（キャリアデザイン）は教育現場で行われているキャリア教育について、「経済界から発せられるエンプロイアビリティ（雇用されるための能力）の大合唱に追随しているかの様な、そうした営みは、どう見積もっても、学校教育の本来の姿を歪めたいびつなものに見えてしまう」と述べています。

児美川教授は恐らく、学校教育の目的は本来、その事を通じて生徒等に対し幅広い教養と専門的な知識を獲得させ、自立する人間を育てる事にあり、少なくとも就職試験対策のために存在する訳ではないという事だと思います。

しかし現実には、「内定率を気にするあまり、就職予備校となりつつある」大学が実在する事は否めないようです（沢田健太著「大学キャリアセンターのぶっちゃけ話」から）。

沢田氏の指摘通りであれば、その様な大学は看板に偽り有りという事になりましょう。勿論そうはいても、多くの高校生や大学生が基礎的学力不足のまま社会に放り出されている現状は「エンプロイアビリティ」を論じる以前の問題というべきで、彼らに高校卒や大学卒に相応しい教養や専門性を身に付けさせて卒業させているか、教育関係者は自ら厳しく問い直す必要はあると思います。（塾頭：吉田 洋一）